

## 本号の岩手医大歯学会雑誌から

この頁は……

本号に掲載されている論文の内容を手っとり早く把握して頂き、歯科臨床との関わりを紹介する頁です。各論文の指導教授あるいは、これに準じる方に紹介の労をとっていただきました。本号のもう一つの目次として御利用下さい。

### 一回積層充填法による改良サンドイッチテクニック法について

沢 口 恵美子 他2名

コンポジットレジン修復時の歯髄刺激防止法としてサンドイッチテクニックが広く臨床で行われている。従来の方法ではガラスイオノマーセメント充填後に酸処理を行い、レジンと接合させていたが、この方法ではガラスイオノマーセメントが感水を生じ、本来の物理的性質を発揮できないことが懸念される。そこでガラスイオノマーセメントを酸処理せずにレジンと接合させる一回積層充填法を考案し、その有用性を従来のサンドイッチテクニックと比較検討した結果、十分臨床応用に耐えうる充填法であることが判明した。  
(本号 11 頁) (久保田 稔 記)

### マウス顎下腺アンドロゲンレセプターの精製とその性質の検討

八 木 一 弘 他4名

上皮成長因子は個体レベルでは生殖と保育機能に、ニュートロピンである神経成長因子は神経の発達維持に必須の因子である。マウス、モルモット等の顎下腺ではこれらの分子をはじめ、レニン、カリクレインファミリープロテアーゼがアンドロゲン依存的に発現している。さらに雌雄マウス顎下腺には前立腺に匹敵する量のアンドロゲンレセプターが存在する。本研究は、マウス顎下腺のアンドロゲンレセプターをアフィニティークロマトグラフィーにより高度に精製し、その性質を生化学的手法により検討したものである。  
(本号 16 頁) (坂巻 公男 記)

### Ca<sup>2+</sup>-activated GK<sup>+</sup> に対する局所麻酔剤の効果

染 井 宏 祐 他6名

ウシガエル交感神経節細胞のカフェイン投与で起るリズム的な過分極性応答 (RMH) が細胞内におけるどのような機序で起るかを、ライアノジンや局所麻酔剤を用いて細胞内記録法にて調べ、さらに局所麻酔剤による RMH 阻害作用が ATP によって reverses する機序についても検討を加えた。その結果、神経節細胞に Ca<sup>2+</sup>-induced Ca<sup>2+</sup>-release の機構が存在する事が示された。さらに、この機構が局所麻酔剤プロカイン、コカイン、リドカインの順に阻害され、また、ATP 投与による局所麻酔剤の reversae は P<sub>2</sub>-purinoceptor を介して起ることが示唆された。  
(本号 26 頁) (鈴木 隆 記)

不正咬合者における第三大臼歯の発育様態に関する研究  
—とくに萌出状態と臼歯部空隙との関連について—

清野 幸男

現代人の第三大臼歯は、埋伏などの萌出異常をおこしやすく、齶蝕や歯周疾患ばかりでなく、矯正学的には咬合の安定という面からも問題になることが多い。これらの原因は歯と顎骨の不調和に関係があり、第三大臼歯を含めた臼歯部の discrepancy について改めて検討する必要がある。本研究では、不正咬合者の第三大臼歯の発育について検討すると共に、第三大臼歯の萌出状態と臼歯部空隙との関連について検討した。その結果、臼歯部の discrepancy を解消するための適切な時期や第三大臼歯の萌出に必要な空隙量などが得られた。(本号 34 頁) (石川富士郎 記)

ケニア共和国における歯肉炎の地域比較に関する疫学的研究

田 附 敏 良

ケニア共和国の首都、新興地域、僻地の 3 地域における歯肉炎等についての野外調査を行った。その結果、歯肉の健康な者は僻地に多く、反対に歯肉炎の重症化が進行している者は、新興地域に多くみられた。また、首都では乳幼児の軽度な歯肉炎が特徴的に認められた。歯肉炎の原因となるプラークとの関連も確認されたが、プラークの付着状態と歯口清掃との関連はあまりみられなかった。以上の疫学的研究から、ブラッシングを中心とした従来からの歯科保健指導を、食生活指導に主眼を置いたものに改めてゆく必要があることが示唆された。(本号 46 頁) (石川富士郎 記)

口蓋に癒痕組織を有する顎骨に加えた顎整形力の効果に関する実験的研究

八 木 實

口蓋の癒痕組織が成長期の顔面骨のどこまで影響をおよぼすのか、さらに、侵襲を受けた顎骨に早期に成長誘導を行った場合、顔面骨にどのような変化が生じるかを実験的に検討した。実験は 4 カ月齢の雑種犬を用い、I 群：無処置、II 群：外科処置のみ、III 群：外科処置後拡大の 3 群に分けて行った。経過観察は、頭部 X 線規格写真と歯列石膏模型を用いて行い、各群の組織所見も検討した。その結果、癒痕組織の顔面骨に対する広範囲な影響と、成長の早期から顎整形力を加えてゆくことが、顎骨を正常に近い形態へ誘導する効果が高いことが分かった。(本号 58 頁) (石川富士郎 記)

## 歯の先天欠如と顎骨の大きさとの関連性に関する研究

吉 中 ひとみ 他5名

本論文は、歯の先天欠如と顎骨の大きさとの関連性について検討したものである。歯の先天欠如を認める症例のうち側貌頭部X線規格写真の角度計測から、 $ANB \leq 0^\circ$ の群では上顎に明らかに先天欠如が多く、 $0^\circ < ANB$ の群では上顎と下顎の間で差は無く、 $4^\circ < ANB$ の群では明らかに下顎に先天欠如が多かった。また、距離計測によると、上顎の小さい群では上顎小白歯部の先天欠如例が多く、下顎の小さい群で下顎前歯部に先天欠如のある例が多くみられ、歯の先天欠如は、顎骨の大きさと関連性があることが示唆された。  
(本号 71 頁) (石川富士郎 記)

## 眼窩下孔副孔の一例

藤 村 朗 他6名

岩手医科大学歯学部平成5年度学生解剖実習において眼窩下孔副孔を有する一例（41体82側中1側）に遭遇した。本例は右側眼窩下孔の下内側に位置し、内容物は神経であった。この神経は翼口蓋窩を下降する大口蓋神経より分岐し、上顎結節より上顎骨体に侵入し、上顎骨内側壁を前方に走行し、上顎中切歯に分布する枝を分岐した後、眼窩下孔副孔より顔面に分布していた。眼窩下孔伝達麻酔の際、上顎前歯の知覚残存はこのような走行の異なった神経の分布が原因であると考えられた。  
(本号 79 頁) (野坂洋一郎 記)

## 上顎両側犬歯の埋伏を伴う反対咬合の治療についての臨床的考察

田 中 誠

本論文の症例では、反対咬合に加えて上顎両側犬歯が水平位に埋伏しており、隣接する前歯の歯根は著しく吸収していた。このような例では次のような点を考慮する必要がある。1) 埋伏歯の処置 2) 隣在歯の処置 3) 埋伏歯の処置としての抜歯と不正咬合改善のための抜歯の整合性 4) 埋伏歯の誘導とその力系 5) 術後の補綴処置の必要性などである。さらに治療の困難な点を患者側に事前に説明し理解を得ておくこと、すなわちインフォームドコンセントの重要性が示唆された。  
(本号 84 頁) (石川富士郎 記)

## 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告— 1993 年度の集計—

佐藤方信他2名

我々の教室で1993年度に取り扱った病理組織検査について集計した結果の報告である。この年度に取り扱った病理組織検査件数は644件であり、検査症例（病変）数は512例であった。これらの検査の月別取扱い件数、症例の年齢分布などについて集計した。また、これらの検査の診断結果から腫瘍および腫瘍様病変、嚢胞および嚢胞様病変、炎症性病変、その他に分類し、それらの発生部位などについても集計した。その上、1991年度、1992年度に我々の教室で扱った病理組織検査の結果とも比較した。

(本号93頁) (佐藤方信 記)

### ◆ ◆ ◆ 上下顎骨に顎整形力を適用した骨格型反対咬合の治療例

三條 勲

骨格型反対咬合は上下顎骨の前後的位置関係に差異をもつが、本例では上下顎骨の位置改善に顎整形力を活用している。上顎骨の正中口蓋縫合部の離開を行うことで側方拡大をし、下顎骨に対しては成長抑制を用いることで上下顎骨の位置関係を変えている。顎関係の位置改善によりその後の動的治療を容易にし前歯部反対咬合、臼歯部のⅢ級および頬舌的歯軸の良好な改善が為されている。骨格型反対咬合の改善においては、適確な時期に顎整形力を用いることが、有効な手段であることを示唆している。

(本号98頁) (石川富士郎 記)

### ◆ ◆ ◆ 上顎第一小臼歯の抜歯により治療した中高年者上顎前突症の一例

古玉芳豊他名

中高年者の矯正治療においては、加齢による生理的变化や歯周疾患、或いは顎機能、さらには審美的な咬合等といった配慮しなければならない問題が多い。本論文では、55歳の上顎前突症の症例を通して中高年者の矯正治療を進めるにあたり、生理的变化への対応や歯周組織を健全に保ちながら、歯の移動を中心に、顎関係にあまり変化を起こさせないように注意する必要があることが示唆された。

(本号104頁) (石川富士郎 記)